

翻字・現代語訳：畠山 大二郎

和歌・現代語訳：渋谷 栄一

補訂：浅川 慎子

底本：国文学研究資料館

更新：2016年12月

【『源氏物語』の誕生における登場人物】

- ・紫式部→『源氏物語』の作者で藤原彰子に仕えました。
- ・村上天皇→第62代の天皇。
- ・選子内親王→村上天皇の第十皇女で大斎院と呼ばれました。
- ・一条天皇→第66代の天皇で村上天皇の孫。
- ・藤原彰子→一条天皇の中宮で上東門院と呼ばれました。

【主な登場人物】

- ・光源氏→物語の主人公で桐壺の帝の第二皇子。
- ・桐壺の帝→光源氏と朱雀院の父。
- ・桐壺の更衣→光源氏の母。
- ・弘徽殿の女御→「一のみこの女御」と同一人物で朱雀院の母。
- ・北の方→桐壺の更衣の母。
- ・鞍負の命婦→帝の命令で北の方を訪問した女官。
- ・藤壺→先帝の第四皇女で、光源氏の義母。
- ・高麗人の相人→光源氏の将来を予言する人物。
- ・左大臣→光源氏が元服するときの加冠役で、葵の上と蔵人の少将（頭の中将）の父。
- ・葵の上→光源氏の正妻で、左大臣の娘。

〔1丁裏〕

【翻字本文】

光源氏物語は、村上天皇女十宮大斎院
より、一条院の後上東門院へ「めづらかなる草子
や侍る」と、御所望の時、式部をめして「何にても
あたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。
式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折
しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の
風情空にうかびければ、先、須磨の巻より
書たると也。巻の数は天台六十巻、題号は四諦

の法門「有門空門亦有亦空門非有非空門」也。

一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌とを取、

【現代語訳】

『源氏物語』の誕生

〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王(大斎院)〉が、
〈一条天皇〉の後である〈藤原彰子(上東門院)〉に「新作の物語は
ありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、《紫式部》を呼んで「がんばって
《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。
《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、
《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の
風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から
書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして(現在の『源氏物語』は
五十四巻)、巻の名前は四諦
の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。
第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、

[2丁表]

【翻字本文】

四には歌にも詞にもなき事也。始は「藤式部」といひ
しを、此物語一部の内むらさきの上の事を勝れ
ておもしろく書たるゆへ、「紫式部」といひかへらるゝ也。
観音ノ化身ト云々。檀那院僧正天台一心三観
血脉許可也。

堤中納言兼輔一惟正〔傍・=因幡守〕一為時〔傍・=越前守〕一女〔傍・=紫式部〕
母は為信女堅子〔傍・為=摂津守〕

【現代語訳】

第四には和歌にも本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ば
れていましたのを、この物語の一部で〈紫の上〉のことをととも
すばらしく書いていたことから、「紫式部」と呼び名が変えられたのです。
〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の
血脈を許されたのです。

紫式部の系図

堤中納言兼輔一因幡守惟正一越前守為時一女(紫式部)
母は摂津守為信女の堅子です。

(注) 一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。

[2 丁裏]

〈絵 1〉 八月十五日の夜、石山寺で、〈紫式部〉が、『源氏物語』を書きはじめた場面

[3 丁表]

【翻字本文】

いづれの御時にか、女御かうゐ、あまたさぶらひ給ける
中に、いとやんごとなきゝはにはあらぬが、すぐれてとき
めき給ふありけり。〔割・いづれの御時とは、醍醐天皇をさしていへり。／時めき給ふとは、「きり
つぼの更衣」の事也。〕

梨壺、照陽舎。桐壺、淑景舎。藤壺、飛香舎。

梅壺、凝花舎。雷鳴壺、襲芳舎。

此きりつぼにすみ給ふかうゐを、御てうあひあれば、
きりつぼのみかどゝも申也。あまたの女御かうゐそね
みて、あさゆふの御みやづかへにつけても、心をのみうご
かし、うらみををふつもりにや、あつしく成ゆき、〔割・をもき／病也〕
物心ほそげに、里がちなるを、みかど、いよ／＼あはれに

[小見出し 1 : ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する]

【現代語訳】

(桐壺)

いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした
中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとっても愛されて
いらっしゃる女性がいました。〔「いつの時代」とは、〈醍醐天皇〉の時代のことです。
帝に愛されていらっしゃった女性というのは、〈桐壺の更衣〉です。〕

宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、

梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。(お後の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前呼びます)

この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、
この時の帝のことを〈桐壺の帝〉ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、
毎日〈桐壺の更衣〉が帝の近くにいることに、嫉妬をして
ばかりいました。

[小見出し 2 : 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる]

そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、
体が弱くなっていました。[重い病気です]

心細い感じがして、実家に帰っていることが多い〈桐壺の更衣〉のことを、帝は、これまで以上に
たまらなく

[3 丁裏]

【翻字本文】

おぼして、人のそしりをも、えはゞからせ給はず。「もろ
こしにもかゝる事のおこりにこそ、世もみだれ、あしかり
けれ」と、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、
楊貴妃のためしもひき出つべう成ぬ。此かうみの父
はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かた／＼
にもをと給はねど、事とある時は、より所なく、心ぼ
そげ也。さきの世にも御契りやふかゝりけん、きよら
なる玉のをのこみこさへ生れ給ぬ。[割・其を光君と／いふ也] 一の
みこは、右大臣の女御の御はらにて、うたがひなきまう
けの君と、かしづき聞ゆれど、此君の御にほひには、
ならび給ふべくもあらず。此みこ生れ給て後は、みかど

【現代語訳】

お思いで、人々が悪口を言っている、愛情をお止めになることができません。

[小見出し 3 : 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る]

中国でもこういう恋愛関係が原因となって、世も乱れ、とんでもないことにもなった
と、世間の人もおもしろくない気がして、人々の悩みの種にもなり、
中国で〈玄宗皇帝〉を夢中にさせた〈楊貴妃〉の話に例えられそうになりました。

[小見出し 4 : 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活]

この〈桐壺の更衣〉の父は
すでに死んでいて、母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后
たちにも負けないようにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、
心細い
様子です。

[小見出し 5 : 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する]

(〈桐壺の帝〉と〈桐壺の更衣〉は)前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました。〔この人を〈光源氏(光る君)〉とといいます。〕第一皇子は、〈右大臣の女御〉が生んだ子供なので、間違いなく皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏(若君)〉の美しさには、とうてい勝つことができません。

[小見出し 6：帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く]
〈光源氏(若君)〉が生まれてからというもの、帝は

〔4 丁表〕

【翻字本文】

御心ことにをきてたれば、坊にもみ給ふべきなめりと、
一のみこの女御は、おぼしうたがへり。あまたの御かた／＼を
過させ給ひ、ひまなき御前わたりに、人の心をつく
し給ふも、ことはり也。あまりうちしきりまうのぼり
給ふおり／＼は、うちはしわた殿、こゝかしこの道にあや
しきわざをして、御をくりむかへの人のきぬのすそ、
たへがたう、まさなき事どもあり、又ある時は、えさら
ぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせ、
はしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。みかどいとゞ
あはれと御らんじて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ
かうみを、ほかにうつし、此かうみのうへつぼねに給はる。

【現代語訳】

この〈光源氏〉をととても大切にしていच्छゃいましたので、〈光源氏〉が、皇太子になるのではないかと、
第一皇子の母である后は、心の中で心配しています。

[小見出し 8：更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける]

帝が、たくさん后たちの部屋の前を
素通りして、何度も何度もお通いになることに、他の后たちが嫉妬して
いるのも、もっともなことです。あまりに〈桐壺の更衣〉が帝に呼び寄せられる
回数が多くなっていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、〈桐壺の更衣〉が通る、
あちらこちらの道にいたずらがされていました。それは、見送りや出迎えの侍女の着物の裾が、
まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、〈桐壺の更衣〉が、
絶対

通らなければならない中廊下の扉を閉めて、こちらとあちらで協力し、

〈桐壺の更衣〉を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。

[小見出し 9：帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す]

帝はますます〈桐壺の更衣〉をかわいそうに思って、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、〈桐壺の更衣〉のもう一つの部屋としました。

[4丁裏]

【翻字本文】

そのうらみ、ましてやらんかたなし。みこ、みつに成給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のにもをとらず。御かたち心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給へば、此君をば人々もえそねみあへず。其年の夏、御母御休所

〔割・更衣の／事也〕、わづらひて里へまかでんとし給へど、つねのあつしさに、御めなれて、いとまさらにゆるさせ給はず。日々にをもり給て、いとよはうなれば、更衣の母、なく／＼
そうして、みこをはとゞめさせ、みやす所ばかりまかで給ふ。うつくしき人の、おもやせあるかなきかにきえ入ものし給ふを御覧じて、きしかたゆくすゑ、よろづの事を契りの給へと、御いらへもきこえず。まゆもたゆげ

【現代語訳】

部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることはありません。

[小見出し 10：若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる]

〈光源氏(若君)〉は、三歳

になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や

性格が、めったにないほど素晴らしいので、〈光源氏(若君)〉を他の后たちも憎むことができません。

[小見出し 11：若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出]

その年の夏、母の御息所

〔〈桐壺の更衣〉のことです。〕は、病気になって実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱い

ことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日

に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、〈桐壺の更衣〉の母は、泣きながら
お願いをして、〈光源氏(若君)〉を宮中に残したまま、〈桐壺の更衣(御息所)〉だけ帰る
ことになりました。

[小見出し 12：帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる]

帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子
を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろな
ことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をすることもできません。つらそうな顔

[5 丁表]

【翻字本文】

にて、われかの気しき也。かぎりあらんみちにも、を
くれさきだゝじとちぎらせ給けるを、打すてゝはえ
ゆきやらじと、の給はするを、女も、いみじと見奉りて、
かぎりとてわかるゝみちのかなしきに
いかまほしきはいのちなりけり

てくるまのせんじなどの給はせて、まかで給ふ。みかど、御
むねふたがり、御使の行かふ程もなきに、夜なかすぐる
程に、たえはて給ふ、きこしめす。御心まどひ、何事
もおぼしわかれず。みこをばかくても御らんぜまほし
けれど、れいなき事なれば、まかでさせ給ふ。みこも
何事ともおぼさず。人々のなきまどひ、うへも御涙の

【現代語訳】

をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に
行こうと約束しましたのに、私を残しては
いけませんよ」と、おっしゃるのを、

[小見出し 13：輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する]

〈桐壺の更衣(女)〉も、とても嬉しく思い、
次のように和歌を詠みました。

人の命には限りがあるものと、今、別れ路に立ち、悲しい気持ちでいますが、
わたしが行きたいと思う路は、生きている世界への路でございます。

帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。

[小見出し 14：心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる]

帝は、

胸がつまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎる

ころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。

[小見出し 15：三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する]

帝は、〈光源氏(若君)〉をこんな時でも御覧になりたいと思う

けれど、喪中の人が宮殿にいることは前例にないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏(若君)〉も

何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙が

[5丁裏]

【翻字本文】

ひまなくなかれおはしますを、あやしと見奉給ふ。

かぎりあれば、をたぎといふ所にて、けぶりになし奉る。

母君も、おなじ煙にと、なきこがれ、御をくりの女ぼう

の車に、したひのりて出給ふ。内より御使ありて、三位

のくらみをくり給ふ。みかどは、一の宮を見給ふにも、わか

宮の御恋しさのみおぼし出つゝ、女ぼう、めのとなどを

つかはし、ありさまきこしめす。野分たちはた寒き夕

ぐれ、ゆげいの命婦をつかはさる。勅書の歌

みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに

小萩がもとをおもひこそやれ

命婦、かうみの母にあひて、

【現代語訳】

とまらなくなっていらっしゃるのを、何だか変だと見えています。

[小見出し 16：桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる]

きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。

母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってでかけました。

[小見出し 18：桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す]
帝から使者があつて、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。

[小見出し 21：帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に鞆負命婦を更衣の里に遣はす]
帝は、第一皇子を御覧になつても、
〈光源氏(若君)〉を恋しく思い出してばかりいて、侍女や乳母などを
つかつて、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強くて肌寒い夕
暮れに、〈鞆負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。

[小見出し 26：帝からの文は、若宮と共に参内するやうにと懇ろに促すものだった]
帝からの手紙に書いてあつた和歌です。

宮中の萩に野分が吹いて露を結ばせたり散らそうとする風の音を聞くにつけ、
幼子の身が思いやられる

[小見出し 31：月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える]
〈鞆負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会つて詠んだ和歌です。

[6丁表]

【翻字本文】

すゞむしのこゑのかぎりをつくしても
ながき夜あかずふるなみだかな

〈うは君〉

いとゞしく虫のねしげきあさちふに
露をきそふる雲のうへ人

をくり物あるべきおりにもあらねばとて、かうゐの
残しをき給へる御さうぞく御くしあげのてうど、そへ
給ふ。みかどはふけてもおほとのごもらず、せんざいの花
御覧ずるやうにて、女ばう四五人さぶらはせて、御物語
せさせ給へり。

御返し奉るうば君の歌。

あらき風ふせぎしかげのかれしより
こはぎがうへぞしづごゝろなき

【現代語訳】

鈴虫が声をせいいっぱい鳴き振るわせても

長い秋の夜を尽きることなく流れる涙でございますこと

(〈靱負の命婦〉が詠んだ和歌に対して、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は次のように和歌を返しました。)

〈祖母君〉

ただでさえ虫の音のように泣き暮らしておりました荒れ宿に
さらに涙をもたらします内裏からのお使い人よ

[小見出し 32：靱負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る]

良い贈り物をする場合ではありませんので、〈桐壺の更衣〉が
残した着物や装飾品を、手紙にそえて
あげました。

[小見出し 34：桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ]

帝は夜更けになってもおやすみにならず、庭先に植えてある花を
眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話を
していच्छやいました。

[小見出し 35：帝は里邸の様子を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う]
帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。

荒い風を防いでいた木が枯れてからは
小萩の身の上が気がかりでなりません

[6丁裏]

【翻字本文】

うば君の物語わか君の事などそうして、をくり

もの御らんぜさすれば、

〈御〉たづねゆくまぼろしもがなつてにても

玉のありかをそことするべく

一の宮の御母、弘徽殿は、久しくうへの御つぼねに参り

給はず、月のおもしろきにあそび〔傍・あ=管絃〕をぞし給ふ。人々

かたはらいたしと、きゝけり。みかど、うば君のもとをおぼして、

雲のうへもなみだにくるゝ秋の月

いかですむらんあさぢふのやど

月日へて、わか君参り給ぬ。きよらにおよずけ給へば、

いとゆゝしうおぼしたり。あくる年の春、一の宮春宮に

[小見出し 37：帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の釵に思いを重ねて歌う]

【現代語訳】

〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の話や〈光源氏(若君)〉のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みました。

〈帝〉

亡き更衣を探し行ける幻術士がいてくれればよいのだがな、人づてにでも
魂のありかをどこそこと知ることができるように

[小見出し 39：帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る]

第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、

「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。

[小見出し 40：更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない]

帝は、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の

生活を心配して、次のように和歌を詠みました。

雲の上の宮中までも涙に曇って見える秋の月だ
ましてやどうして澄んで見えようか、草深い里で

[小見出し 43：若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵]

月日が過ぎて、〈光源氏(若君)〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に

[7丁表]

【翻字本文】

さだまり給ふにも、此君をひきこさまほしうおぼせど、
世のうけひくまじき事を、はゞかり給て、色にもいで
させ給はず。彼うば君、なぐさむかたなきゆへにや、うせ
給ぬれば、又これを、かなしびおぼす。若君七つに
成給へば、文はじめせさせ給て、御がくもんはさる物にて、
琴笛のねにも、雲井をひゞかし給へり。其比こまう
どのさうにん奉りて、此君のざえかしこく、かたちの
きよらなるにめで奉りて、ひかる君とつけ奉り、を
くり物どもさゞげけり。此君をたゞ人にはあたら
しけれど、源氏になしたてまつるべくおぼしをき

てたり。

【現代語訳】

決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠慮して、表情にも出しません。

〔小見出し 44：祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去〕

あの〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまいましたので、またしても帝は、悲しいことだと思いにあります。

〔小見出し 45：若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服〕

《光源氏(若君)》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、

〔小見出し 46：若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮〕

勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。

〔小見出し 47：高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を観て不思議がる〕

そのころ《高麗人の相人》がやってきて、

〔小見出し 50：帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断〕

この《光源氏(若君)》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この〈光源氏(光る君)〉を皇族から外すのは惜しいけれど、源氏の名字をつけて、臣下にするように決めました。

〔7丁裏〕

〈絵2〉〈光源氏〉七歳のときに、迎賓館で、〈光源氏〉が高麗の相人に占いをしてもらっているところ

〔8丁表〕

【翻字本文】

年月こそへて、御休所の御事わすれさせ給はず、
御心なぐさむかたなし。先帝の四の君、御かたちすぐ
れ給へる事を、ないしのすけ、そうして奉らせ給へり。

〔割・其を藤つぼと／申也〕昔の御休所によく似給て、人のきは
もまさり給へば、をのづから御心うつりにけり。源氏
の君は、みかどの御あたりさり給はねば、藤つぼにも
しげくわたり給ふ。光君に立ならび、御おぼえもとり
／＼なれば、かゞやく日の宮ときこゆ。源氏の君、十二
にてげんぶくし給ひ、ひきいれの大臣の、みこばら
の姫君を、そひぶしにとさだめ給ふ。〔割・其あふひの上也〕

〔小見出し 51：更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く〕

【現代語訳】

年月が過ぎても、帝は、〈桐壺の更衣(御息所)〉のことを忘れることがなく、
心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さまで、見た目がとても美しい
ということ、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました。

〔その人を、〈藤壺〉といいます。〕

〔小見出し 52：典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く〕
昔の〈桐壺の更衣(御息所)〉によく似ていて、

〔小見出し 55：藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしだいに移る〕
身分

も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ちに移っていきました。

〔小見出し 56：源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する〕
〈光源氏〉

は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉のところにも
《帝》と一緒によくついていきます。

〔小見出し 59：弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃〕
〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれ

ぞれにとっても愛されているので、〈藤壺〉のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の
宮」とも呼びました。

[小見出し 60 : 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う]

《光源氏》は、《十二歳》

で《元服》と呼ばれる成人式をして、

[小見出し 63 : 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする]

《左大臣(引き入れの大臣)》の娘で、皇女の母親をもつ

お姫さまを、妻にすることが決定しました。[その妻が〈葵の上〉です。]

[8 丁裏]

〈絵 3〉〈光源氏〉十二歳のときに、宮殿で〈光源氏〉が元服の儀式をした場面

[9 丁表]

【翻字本文】

〈御〉いときなきはつもとゆひにながきよを

ちぎるこゝろはむすびこめつや

左大臣御返し。

むすびつる心もふかきもとゆひに

こきむらさきのいろしあせずは

左のつかさの御馬、蔵人所の鷹すへて、給り給ふ。

みはしのもとに、上達部みこたちつらねて、ろく

どもしな／＼に給り給ふ。その夜、おとゞの御里に

源氏の君まかでさせ給ふ。[割・源は十二才／あふひは十六也] おとゞの子蔵人

少将には、右大臣殿の四の君をあはせ給へり。源氏の君は、うへのつねにめしまつはさせ給へば、

心やすく

[小見出し 65 : 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する]

【現代語訳】

〈帝〉幼子の元服の折、未永い仲を

そなたの姫との間に結ぶ約束はなさったか

〈左大臣〉は返事として次のように歌を詠みました。

元服の折、約束した心も深いものとなりましょう

その濃い紫の色さえ変わらなければ

[小見出し 66 : 左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大]

左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげま

した。

宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。

[小見出し 67：元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚]
その夜、〈左大臣〉の家に
〈光源氏〉は行きました。〔〈光源氏〉は十二歳、〈葵の上〉は十六歳です。〕

[小見出し 69：左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う]
〈左大臣〉の息子
の〈蔵人の
少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉と結婚することになりました。

[小見出し 70：光源氏は藤壺を理想の女性として慕って思い悩み、葵の上とは疎遠]
〈光源氏〉
は、帝がいつも自分の側近くにお呼びになるので、ゆっくりと

[9 丁裏]

【翻字本文】

里ずみもし給はず。藤つぼの御ありさまをたぐ
ひなしとおぼし、さやうならん人をこそ見め、にる
ものなくもおはしけるかなとおぼせば、おほいどのゝ
君には心もつかず。おとなになり給てのちは、有
しやうにみすの内にもいれ給はず。御あそびの
おり／＼、ことふえのねにきゝかよひ、ほのかなる御
こゑをなぐさめにて、内ずみのみこのましようおぼえ給ふ。

【現代語訳】

〈左大臣〉の家に落ち着くこともできません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中に
めったにないものと思って、〈藤壺〉のような女性と結婚したい、〈藤壺〉と似ている
女性もいないなあと思うので、
〈葵の上(大殿の君)〉とはあまり親しくなりません。

[小見出し 71：宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う]
大人になってからは、子供
の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする

時々、琴や笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。